

## 幕末に戦場となった双柳

尾崎 泰弘

慶応 4(1868)年(9 月に改元して明治元年)5 月 23 日(新暦の 7 月 12 日)、飯能の町とその周辺は戦場になりました。戊辰戦争の局地戦として、旧幕府方の振武軍などと明治新政府方との間で行われたその戦争は「飯能戦争」と呼ばれています。この戦争には、渋澤成一郎(喜作)や尾高惇忠、渋澤平九郎など、令和 3 年の大河ドラマ「青天を衝け」の主人公である渋澤栄一の縁者が関わっており、これらの人物を演じる俳優が既に発表されています。



大正時代の秀常寺境内

さて、飯能戦争では、能仁寺や観音寺、智観寺などに旧幕府方が駐屯していたため、激しい戦闘が繰り広げられたのは飯能の町が中心でしたが、新政府方が飯能の町に入ってくる前に双柳でも戦いがありました。

扇町屋(現在の入間市)を出た新政府方は、入間川を渡って笹井から旧幕府方が拠点としていた飯能へと向かいます。その指揮をとった大村藩士渡辺清の届書によると、新政府軍は二手に分かれ、大村(現在の長崎県)・佐土原(現在の宮崎県)・岡山の 3 つの藩は飯能の町の正面を、福岡・久留米(現在の福岡県)両藩は中山の智観寺を目指しました。

このうち福岡・久留米両藩は、中山へ向かう途中、双柳で旧幕府方の攻撃を受けます。これに対し新政府方も発砲したため戦闘が始まり、福岡藩は大砲も使って応戦しました(「久留米藩士柴田光衛関東奥州征討記録」など)。そのことを証明するように、飯能警察署の東側の畑で、四斤山砲と呼ばれる大砲の榴弾が見つかっています(写真)。また、その際の戦闘で双柳の秀常寺が戦災に遭ったことが日高市下鹿山の水村家文書に記されています(「御届書」)。

飯能の町より少し離れた現在の坂戸市や日の出町(東京都)に残された古文書には、この双柳の戦闘で新政府方(ただし川越藩)が敗北したとの記述が見られます。新政府方の記録が旧幕府方の敗走を伝えているのと全く逆です。

飯能戦争で旧幕府方が敗走したことは確かであり、そこからすると双柳の戦争で旧幕府方が勝利したとは考えにくいでしょう。同じ事象について書いていても、記録を残した人の情報源や立場(姿勢)、そして誰に向けて書かれたものなのかによってその内容が異なることがあります。それを吟味しながら事実近づいていきたいものです。



双柳で見つかった四斤山砲の砲弾

大河ドラマ「青天を衝け」に飯能戦争が出てくることを望みつつ、本日はこの辺で。